

槐かい

同井省二創刊

平成15年7月号

平成十五年七月一日発行 第十三巻第七号 通巻第一四五号（毎月一頁）一日発行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



春日影

高橋将夫

大日の肩にかかりし春日影

伏魔殿春の障子を開けにけり

天上の風除け解いてありにけり

天道のまだ半ばにて蜷の道

つまづきて影の離るる春野かな
ながらへてふらここ漕いでをりにけり
メタリックブルーの春の眠りかな
その上を子供ころがるうまごやし
いつもとは違ふ顔して亀鳴けり
しばらくは穴を出でたる墓のまま
猩々の面をつけし花の冷え

槐賞受賞作品二十句

雨村敏子

あんぱんの臍も交野のさくらかな
夜櫻やうへむいてゐる獺の鼻
鳩尾の目覚めてをるや櫻の夜
花々々潮の沖はまああるくて
花びらの潦なり波羅蜜多
無重力さくらの花が満開で
白檀の鼻がゐてさくらかな
花の闇水がうごいてゐたりけり
花曇 吉祥 天の眉根かな
たなごころ濡れ夜櫻のまへにゐる

普賢菩薩のうてななりける花の山
象の耳ひらひら動き花の雲
砂山に凹^ミありけり残る花
夥しい櫻蕊なりフラメンコ
陸ふたつ越えてゆきたり花は葉に
象使ひの海へ入りゆく鎮花
花の下にて先生と花守と
峯の櫻のこゑつづきををる眠りかな
靄靄と時流れゆくさくらかな
空海の山へゆつくり花の風

蝟とべる
市場基巳

目に止めて見し川蟬の春めきし
池水の温みに雲のずり下り
耳ふかく澄み鳴く田螺村の昼
その手つき器用ならねど土筆摘む
ふらここを雲に抱かれたくて漕ぐ
春鯉の紅澄む川の深ければ
花椿さみしくならぬうちに発つ
かすむ日につつまれ枝の繭ゆれる
木五倍子咲く高さに風の音すなり
雲ひかり水ひかり蛇穴出づる

特別作品

野の糞と見しは春蛇這ひ出せる
忙しさにうちすぎけらし蟻もぬき
咲きみちて水つたひくる花明り
深谷にとどきし日脚梅白し
あれば掘りし野蒜に山の夜をすごす
煮しめたる土筆まともにある苦み
天日にせり上がりつつ蟆子とべる
日はあれど無きにもひとし竹の花
首なき屍ずぶ濡れ朝湯の蠅
斑猫の案内の堂へついてゆく

槐安集

石脇みはる

洞穴を通り抜けたる遍路かな
著莪の辺に風呂敷広げぬたりけり
潮風をまともうけしさくらかな
土掘つて貝殻いでし聖霊会
薬草の乾いてゐたる五月かな

市場基巳

草の餅川ちかき家の夕べ冷ゆ
出湯浴みて木倍子に朝日差すを待つ
飯蛸の飯舌先にあそぼせて
なにか佗し飯蛸の飯とぼしきも
パン食に済ませし春の雨の朝

水野恒彦



虚子の忌の犬の嗅ぎゆく春の泥
光るもの唧へゆく鳥復活祭
亀鳴いてをり西方は胞衣のいろ
横臥して血の傾きぬ櫻の夜
生も死もその下をゆく藤の花

竹内悦子

魚津には行かずじまひや露の臺
夜櫻や髪を束ねてをりにける
紫陽花の青き蕾とグローブと
春愁の傘の雫を振りにけり
臍の緒の箱開けてをりほととぎす

木下野生

上流にダムありといふ花筏
満ち潮のはじまつてをり大千潟
大きさに少しのちがひ桜鯛
余り苗夕ぐれの日のさしてをり
孕猫みなみの風がすこしだけ

加藤みき

鳥の頭を鳥が咬みをり春の昼
雨中なりわれに賜はる花吹雪
夜の潮の干潟に満つる音なりき
桜鯛座布団の数足りなくて
青葉木菟がひとまはりして来たる森

延広禎一

龍天に登りて華嚴縁起かな
おんあろりきやそはか蝦蛄茹でらるる
鳥交るや砂鉄の踊る大磁石
あかときの眩きことに櫻かな
油屋に日差ありけり柳の芽

大島翠木

地すべりの山に白樺三鬼の忌
まつさらな花に雨降る石の椅子
惜春やゆつくり崩す鯛のかま
耳たぶと首のほくろと豆の花
真砂女逝く風の抱きよす糸桜

槐市集

男波弘志

「一緒に来い」柘榴のやうな顔で言ふ
喪の家の煌々と陰寒ぼとかりき
泣かれつつ鯨の墓の方へゆく
ゆつくりと糞まりつつ乳房またぐ弄るよ
ここで泣く誰かがそこに居るうちに

加藤富美子

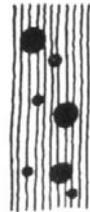
夏鶯汲み水ほのと木のにほひ
波の秀の春満月を捉へけり
夕月の端山に出でし五月鯉
石段の真ん中くらき花は葉に
夕空にいたる残像白牡丹

金澤明子

おぼろ夜の果ててチグリス曲らんか
爆音の記憶の中のさくらかな
千眼のまつ毛ふせたる山つつじ
両肩をすべる友禪花衣
くるぶしに波来る十二単かな

北嶋美都里

薔薇の芽や鉄扉の半ば開きをり
夜明け前地平にかかる春の月
かたはらにゲートボールや花水木
鳥帰る片付けてをく机かな
剪定を始めるらしき女かな



槐集

高橋将夫選

無重力さくらの花が満開で
枚方 雨村 敏子

まんぼうの背鰭背鰭の春霞

象使ひの海へ入りゆく鎮花

陸ふたつ越へてゆきたり花は葉に

花椒ホアジツを挽いてをりけり春惜しむ

山櫻池のまはりの山ざくら
京都 竹中 一花

雨止みの御室おむろに残る櫻かな

黒書院出てより坐る藤の下

白藤や矢印に行く玉座の間

糸櫻 関伽井の水の薄濁り

春雨の地表を叩く花押かな
枚方 中野 京子

明るさの地下を出でけり朧の夜

風光り足裏に乾く葉音かな

日輪のいづこに昇る霞濃し

桃咲くやゆたにたゆたにゆく流れ

子雀に阿吽の息のありにけり
枚方 植木 戴子

杉花粉張り子の虎の左向く

空缶に乗りたる亀や花の冷

辛夷咲くモデルルームの赤子かな

夕長し海の匂ひの波布茶かな

灌仏会 赤松の幹なま生乾き
岡崎 本多 俊子

金盞花たひらな石に日の溜り

母の忌や浅蜷につよき貝柱

穴じやこ雑魚の穴の深さや春の雲

翻車まんぼう魚の奥歯はげしき夏はじめ

紅唇の渴くことなき萬愚節
安城 天野きく江

飯の世を白紙に戻す春の霧

開け放つ鼓膜でありし雉子かな

誰も居ぬ真昼蛙の目借時

昼過ぎのまだ濡れてゐる蛇の衣

銀河往来

高橋将夫

俳句とレトリック②

「精神の風景」(精神の具象化)という場合、具象化された作品は隠喩(メタファー)といえよう」と書いた。

しかし、読者は必ずしも作者の思想なり、「精神の風景」を知ろうとして作品に接するわけではない。思想、人生観、理屈、教訓、ましてや小主観の押し付けは読者の望むところでないからう。単純に言えば現代俳句は客観写生の名のもとに多くのものを切り捨ててきた。

かといって、日常の羅列、報告、無味乾燥の作品を客観写生、多作の大儀名分のもとに、大量に押し付けられてはたまらない。作品には、読者の感性にうったえる何か、奥行や広がりを感じさせる何かが不可欠であることに、誰も異論はなからう。

〈精神の具象化〉として投げ出された作品が、それ自体隠喩(メタファー)であることを読者に感じさせず、それでいて、自然に作者の精神世界へと誘われる：そんな作品を希求してやまない。

短夜の途中をものとしてねまる 省 二
猩々に糞投げられし春の昼 //

岡井省二作品の多くは暗喩と象徴。ちなみに、「ものとして」も、「糞投げられし」も、俳句そのものの暗喩にほかならない。

無重力さくらの花が満開で 雨村 敏子
満開の桜の中で、身体が宙に浮くような感覚をおぼえた。まるで、

無重力になったかのような。

山櫻 池のまはりの山ざくら 竹中 一花
山櫻と池だけで成立している句。省二先生の山櫻の句を彷彿とさせる。

春雨の地表を叩く花押かな 中野 京子
春雨は、しとしとばかりではない。激しく降っている地表に花押を想像するとは、なんともユニーク。

子雀に阿吽の息のありにけり 植木 戴子
阿吽といえは、まず運慶の仁王像が思い浮かぶ。子雀に阿吽の呼吸を感じ取るあたりが、非凡。

母の忌や浅蜷につよき貝柱 本多 俊子
貝に残った貝柱はなかなか取れない。時あたかも母の忌。そういえば、母も芯が強かった。

仮の世を白紙に戻す春の霧 天野きく江
仮の世とはいえ、時にはやり直したいこともある。全てが霧に包まれた。これで全てが白紙に戻った。

道草やてんでに田螺見せ合ひて 近藤きくえ
田螺を見せ合うなんて、なんとも素朴な田園風景。もつとも、最近ではなかなか田螺も見られないが。(以下略)